

一般修辞学

修辞学は、古代ギリシャに生まれ、ヨーロッパ世界で発展した、言説構成の技法の体系である。ギリシャでは書き言葉よりも公共の場での口頭の弁論が重視されたため、弁論を準備する発想→配置→修辞→記憶→発表のプロセス全体を包括する、修辞学 (rhetoric) の修練が進んだ。アリストテレス Aristotelēs の『弁論術』、クインティリアヌス Marcus Fabius Quintilianus の『弁論術教程』などがその全貌を伝えている。弁論の技術は、論理をふまえながらも、説得性により重点をおくものであったため、議論の内実と乖離する傾向も生まれた。

古代ローマを経て、修辞学はヨーロッパ世界に継承された。弁論よりも書き言葉が重視されるようになり、効果的な言語表現を工夫する修辞の部分 (狭義の修辞) が、もっぱら発展した。さまざまな比喩や文章構成上の技法の洗練がされ、大学でも正科の1つとして教えられた。近世になると、哲学や自然科学のように内容上の真理を重視する学科が興隆して修辞の比重が低下し、単なる文章の装飾技法にすぎないとみなされるようになり、正科からも外れてしまう。

20世紀にはいると、ラジオ、テレビなど新たなマス・メディアの登場によって口頭の弁論と説得力が大きな社会的威力を占めることになる。記号学や言語哲学が、真理と言語表現とを切り離しうるとする前提に異を唱えはじめ、修辞学があらたな領域として見直されるようになった。どのように言語表現を構成するかということは、そこに盛り込まれる内容や、言語表現をとりまく社会関係の総体と結びついている。修辞学を、単なる文章の装飾技法ではなく、言語表現の構成にかかわるプロセスの全体においてとらえ、言語学や記号学の最新の成果をふまえて、もっと一般的な社会的文脈のなかで再構成する試みが、一般修辞学である。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 記号学(記号論)、言語哲学、レトリック

【主要文献】 Groupe Mu, *Rhetorique générale*, Paris: Larousse, 1970 (グループム編/佐々木健一・樋口桂子訳『一般修辞学』大修館書店, 1981)。

隠喩

【英】 metaphor

修辞法の1つで、似ていない2つのものを比較すること。直喩と対照される概念で、「あなたの笑顔はバラのよう (like, as) だ」といえば直喩 (simile) なのに対して、「あなたの笑顔はバラだ」といえば隠喩となる。比較する2つのものは、あまり似すぎていてはならず、ある程度距離があることが必要で、それが結びつくところに驚きの効果がある。笑顔とバラの関連 (美しい、見ると嬉しい、……) を理解するには、頭をはたらかせてその表現のいわんとするところを発見する必要がある。同じ表現の比喩が繰り返されると関連が自明化し、陳腐に感じられる。陳腐な比喩を避けるため、隠喩は次第にかたちを変えていく。隠喩は、詩においてもっとも多用されるが、そのほかの文学的表現や日常言語のなかでも用いられる。日本語の場合、ヨーロッパ言語と違って、隠喩/直喩の違いははかならずしも明確に認識されてこなかった。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 直喩、レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998。

ウィトゲンシュタイン, L. J. J.

Wittgenstein, Ludwig Josef Johann

1889~1951

ウィーン出身で、ケンブリッジで活躍した20世紀の哲学者。ユダヤ系富豪の4男に生まれ、工学を学んだのち哲学を志す。B. ラッセル Bertrand Arthur William Russell の学生となり、数学基礎論から言語と思考の哲学的基礎に考えを進め、『論理哲学論考』を著す。第1次大戦に従軍。一時、哲学に興味を失うも復帰、『論考』の立場 (写像理論) を批判的に克服する努力のなかから、言語ゲーム (language game) のアイデアに到達。ケンブリッジのゼミで、思索を彫琢。ガンのため死亡。友人に、ケインズ John Maynard Keynes, スラッファ Piero Sraffa など。生前、未公開だったノートは、『哲学探究』『青色本』『茶色本』などとして死後出版される。論理実証主義、分析哲学、日常言語学派などの現代哲学の諸潮流や、隣接の分野 (法学、社会学、美学、言語学など) に影響を与え続けている。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 言語ゲーム、日常言語学派、分析哲学、ラッセル, B. A. W., 論理主義 (実証主義)

【主要文献】 山本信・黒崎宏編『ウィトゲンシュタイン小事典』大修館書店, 1987。

換喩

【英】 metonymy

あるものを指すのに、それと関連の深いものを代わりに比喩として用いる修辞法の1つ。例えば、「結婚は人生の墓場」という場合、墓場は、死や終着点という代わりになっている。「霞が関」といえば中央省庁 (の官僚) を、「制服」といえば軍人を指すたぐい。換喩は、一部分で全体を指すたぐいの提喩 (synecdoche, 例えば、「パン」で食べ物全般を指す) と関連が深い。どちらも、霞が関→中央省庁、パン→食べ物のように、置き換えて元の意味に戻すことができる。換喩を成り立たせる関係にはさまざまなものがあり、原因で結果を、容器で内容を、産地で産物を、象徴で本体を、抽象物で具体物を、道具で本体を、体の一部で感情を、……指すなどのケースがあるとされる。言語学者ヤコブソン Roman Jakobson が、換喩と隠喩とを、人間の精神活動の2つの原理と指摘したので、換喩はあらたに注目を集めるようになった。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 隠喩、提喩、ヤコブソン, R., レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998。

逆説

【英】 paradox

一見して誤っていると思われるのに、その前提や推論を調べてみても、誤りをうまく指摘できない言明。論理学や証明が盛んな古代ギリシャの哲学者らは、多くの逆説に注目した。例えばゼノン Zēnōn の「アキレウスはカメに追いつけない」や、エピメニデス Epimenidēs (クレタ出身) の「クレタ人は嘘つきだ」など。哲学に限らず、日常言語のなかでは、さまざまな種類の奇妙な言明や表現が、逆説 (背理、パラドックス) と呼ばれる。常識と反しているだけで、実は正しいと判明する逆説もある。このような意味論的逆説 (semantics paradox) に対して、20世紀初頭には論理的逆説 (logical paradox) が関心の的となった。集合と論理によって数学を基礎づけようとしていたB. ラッセル Bertrand Arthur William Russell は、自分自身を集合の要素としない集合の集合 (ラッセル集合) をめぐるパラドックスに逢着し、これを回避するため階型理論 (タイプセオリー) を提案した。逆説はしばしば、既存の理論を見直し脱構築するきっかけとなる。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 パラドックス、ラッセル, B. A. W., 論理学

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998。

言語ゲーム

【英】 language game 【独】 Sprachspiel

20世紀の哲学者L. ウィトゲンシュタイン Ludwig Josef Johann Wittgenstein が、『哲学探究』など後期の著作で唱えた考え方。彼は前期の『論理哲学論考』で、言語の意味は、それが対応する世界のあり方にほかならないとする「写像理論」を展開していた。その後、前期の言語理解の問題点に気づいてそれを掘り下げ、言語の意味はむしろ人びとのふるまいの一致によって支えられているという認識に達する。言語を含むこの世界すべてを成り立たせている、人びとの一致したふるまいのことを「言語ゲーム」という。言語ゲームはこの意味で、規則 (ルール) に従った行為の集まりである。言語ゲームにはさまざまな種類があり、すべてを枚挙することはできない。ウィトゲンシュタインは、言語や行為のみならず、数学や芸術や私的体験なども、言語ゲームの考え方によってよりよく基礎づけられるとした。言語ゲームは、形式主義や公理系による通常の言語や意味研究とは対極的な、もう1つの知的源泉として現代思想全般に影響を与え続けている。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 ウィトゲンシュタイン, L. J. J., 言語, 自然言語理解

【主要文献】 橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論』勁草書房, 1985。

構造主義

【英】 structuralism 【仏】 structuralisme

1960年代にフランスで台頭した現代思想の新しい潮流。人類学のレヴィ=ストロース Claude Lévi-Strauss, 歴史学のフーコー Michel Foucault, 精神分析のラカン Jacques Lacan, マルクス主義のアルチュセール Louis Althusser らが中心人物とみなされた。レヴィ=ストロースは、ソシュール Ferdinand de Saussure の一般言語学やその流れをくむヤコブソン Roman Jakobson の分析技法をヒントに、親族現象が意識されない合理的な動機を隠していることを論証し、神話分析では、人びとの集合的な思考が一定の秩序 (構造) に従うことを示した。構造主義は、さまざまな社会が未開な段階から発展・進化して近代に至るというヨーロッパの通念を、根拠のない自民族中心主義 (ethnocentrism) だとして批判する。構造主義は冷戦下、経済や文化が停滞し、行き詰まっていたマルクス主義に対する根本的な批判にもなっていた。その後、構造主義の方法が形式的・表層的であるなどの批判がなされ、ドゥルーズ Gilles

Deleuze, デリダ Jacques Derrida, ガタリ Félix Guattari, リオタール Jean-François Lyotard などのポスト構造主義が隆盛となっていく。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 アルチュセール, L., ソシュール, F. de, デリダ, J., フーコー, M., ヤコブソン, R., レヴィ=ストロース, C.

【主要文献】 橋爪大三郎『はじめての構造主義』講談社現代新書, 1988.

誇張法

【英】 hyperbole; exaggeration

あきらかにそれとわかる程度のはなはだしい表現を用いて、強い感情や印象を伝える修辞法の1つ。「万年筆」「雀の涙」のように、言葉そのものに誇張を含む場合と、「腹が減って死にそうだ」のように言葉の組み合わせである文全体が誇張になっている場合とがある。誇張法の効果は、それが誇張だとわかる（文字どおりでない）と理解できる）ことにもとづく。そのように極端な表現をとらなければならないほど、強い感情や印象があったのだろうかという推量がはたらく。「蚊のなくような声」のように、誇張は比喩とも関連が深い。そして比喩と同様にあまり常用されると、誇張法の効果はなくなる。誇張法と反対のものに、ことさらおだやかな表現を用いる、緩叙法 (litotes, meiosis) がある。例えば重傷なのに「なに、ほんのかすり傷」などと言う場合。誇張法は、単純・直接的な修辞法であるため、ヨーロッパ修辞学ではあまり高級でないといみなされる傾向があった。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

対比法

【英】 antithesis

相反する語句やアイデアを、その対照がきわだつ表現によって強調する修辞法。概念のうえで反対であることがらを、言語表現においても対照させることで、その関係を印象づける。例えば、「カエサルのはカエサルへ、神のものは神へ」と言えば、世界に2つの並行する秩序があって、一方ではカエサルが、他方では神が支配者であり、人間はその両方に従わなければならないが、その従い方が違う、という対照が明らかになる。対比法は古代ギリシャ、ローマ時代から盛んに用いられ、ヨーロッパでもさまざまな慣用語、成句、詩歌などが生み出された。現代社会では、限

られた情報のなかに印象的なメッセージを盛り込むため、広告コピーなどのなかにしばしば用いられる。例えば、「美しい人はもっと美しく、そうでない人もそれなりに」など。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

直喩

【英】 simile

「~のように」「~みたい」「あたかも」など、比喩であることを明示する表現をとまなう修辞法の1つ。明喩ともいう。比喩であることを明示する表現をとまなわない隠喩 (metaphor) と対照される。直喩 (例えば、「露のような命」) は、比喩がどのような性質の類似を表現しているのかを明示することもできる (「露のようにはかない命」) が、隠喩 (「露の命」) はそれができない。そのため隠喩は、受け手の推量や想像力の余地が大きく、直喩にくらべて高級だと、ヨーロッパの修辞学では考える傾向があった。けれども直喩には、比喩が確実に理解されるという利点があり、隠喩とはちがった直喩独特の機能もあると考えられる。いっぽう日本語は、英語の仮定法にあたるようなはっきりした形式がないため、直喩と隠喩は伝統的に、明確に区別されてこなかった。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 隠喩, レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

提喩

【英】 synecdoche

部分で全体を (またはその反対に、全体で部分を) 指すような比喩的表現。修辞法の1つ。ヨーロッパの修辞法では、換喩 (metonymy, あるものを指すのに、それと関連の深いもので置き換える) の一種とされた。全体と部分の関係には、意味的な場合 (花のかわりに桜、または、桜のかわりに花)、構成要素的な場合 (船のかわりに帆、海のかわりに波) がありうる。さらに進むと、固有名によってあるカテゴリーを指すこともある (ケネディ→若くてハンサムで有能な政治家)。部分と全体の関係は、一義的でないから、いろいろな提喩をつくり出すことができる。また、部分と全体の関係は、広い意味で、なんらかの関連があることにほかならないから、提喩を換喩の特殊な場合と考えることは妥当だと言えよう。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 換喩, レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

転喩

【英】 metalepsis

ものごとを直接にいうかわりに、間接・婉曲にいう場合の、やや長めの表現。修辞法の1つ。例えば、「トイレはどこですか」というかわりに「手を洗いたいのですが」、「結婚してください」というかわりに「毎日味噌汁をつくってくれるかな」など。伝統的な修辞学では、転喩は、換喩の一種と考えられてきた。転喩が婉曲表現として機能するためには、遠回しな表現にもかかわらず、話し手の意図が直接の表現と同じように、確実に相手に伝わる必要がある。「手を洗いたい」のように、言い回しが習慣化してしまうと、意図は確実に伝わるが、あまり遠回しに言ったことにならない。いっぽう「この部屋は蒸し暑いですね」と言っても、聞き手が「窓を開けて下さい」という意図だとは受け取らないかもしれない。こうした微妙な意味のキャッチボールが、転喩の醍醐味である。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

反語

【英】 irony

ほんらいの表現のかわりに、その反対の意味をもつ表現を用いる修辞法の1つ。アイロニー、または皮肉ともいう。例えば、ばかばかしいことをしてかしたひとに向かって「まあ、頭がよいこと」と言えば、その反対の意味になる。反語が成立するためには、実際に言葉の文字どおりの意味とは反対であることが、聞き手にわかっている必要があり、だからこそ反語としての効果をうむ。演劇では、観客がわかっていることがら、これから起こると期待していることがらと反対の内容の言葉を登場人物がのべることにより、悲劇的または喜劇的な効果を強めるという手法がしばしば用いられる (dramatic irony)。アイロニーのほかアンチフレーズ (antiphrase) も、反語法と訳される。アイロニーとアンチフレーズは、まったく同じだという論者と、少し異なる (例えば、後者は婉曲語法のようなものである) という論者があり、定説はない。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 婉曲語法, レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

諷喩

【英】 allegory

比喩であることを明示せずにある内容をのべ、それが字義どおりでない別な意味に受け取られることを意図した修辞法の1つ。短いものは寓言 (fable) という。教訓を含んだたとえ話 (イソップの寓話や、イエスのたとえ話など) が、これにあたる。「河童の川流れ」のような諺や『青い鳥』のような童話、文学作品にいたるまで、諷喩はひろくいき渡っているといつてよい。諷喩は、人間ではないものが人間のようにふるまう場合、擬人法と結びつく。また、平和→鳩、大鎌→時間、などの約束にしたがって構成された諷喩的な美術作品 (例えばティツィアーノ Tiziano Vecellio やボッシュ Hieronymus Bosch の作品) は、イコノグラフィーとよばれる。音楽でも、模倣音楽や主題音楽の試みは、同様の発想にもとづく。日本で多く生まれた説話文学や物語は、仏教思想を下敷きにした諷喩とも言えよう。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 イコノグラフィー, レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会, 1998.

無意味

【英】 nonsense

みたところは通常表現だが、実際には意味が欠けていること。ナンセンス。論理学では、ある1つの命題が真でも偽でもあることが証明されると、すべての命題が真でも偽でもあることになり、なにも主張できなくなってしまうことが知られている。これは、無意味の一種と考えられる。ウィトゲンシュタイン Ludwig Josef Johann Wittgenstein は『論理哲学論考』で、意味を持たない (世界のなかにそれに対応する事実をもたない) 命題には、(1)対象を指示しない名辞 (例えば「いまのフランス国王」) が含まれている場合と、(2)命題が不適格に構成されている場合 (例えば「この円は四角い」) があるとした。まともな表現を言い換えて、ばかばかしい内容におとしめてしまう冗談も、ナンセンスとよばれる。ルイス・キャロル Lewis Carroll の『不思議の国のアリス』は、ナンセンス文学の古典である。実存主義の文学や現代文学でも、ナンセンスが大きな役割を演じる。 ●橋爪大三郎

【関連項目】 ウィトゲンシュタイン, L. J. J., 論理学

【主要文献】 高橋康也『ナンセンス大全』晶文社, 1977.

大学教育の使命はどうか

あるべきかを問うシンポジウムがこのほど、京都市左京区の京都精華大学で開かれた。大学が良い企業に就職するパスポートという神話が見直されつつある現在、今後の大学教育のあり方などについて、論壇の第一線で活躍する学者らがパネラーとなり、積極的に意見を戦わせた。

大学教育の使命とは

— 京都精華大でシンポ —



大学教育の使命をテーマに活発な意見が交されたシンポ(京都市左京区・京都精華大学)

学者ら白熱の討論

を区別し、個人が学ぶ動機を重視。「大学教員は競争は成り立たない」と消費財としての教育を提議する一方、橋爪教授は「大学は公教育ではないので、学生が自己責任で学費を払って学ぶのが原則。日本の各大学は『何のために存在するか』という使命を社会に宣言するのが先決だ」と反論した。

一方、大学の教育内容について上野教授は「大学の教育で、社会に出てから役に立つことはほとんどないが、問いを立てる(こと)こそ人間の自立にとって大切な能力」と発言。これに対して刈谷教授は「いまの大学には教え方を向上させるシステムが必要。学生が問題意識を持つことを教員が助ける教育をつくらなければならない」と語った。

大学本来の使命を考えたところの趣旨で開かれた。始めに、東京工業大学の橋爪大三郎教授(社会学)が、「日本の大学の現状は入学試験、教育の

中身、研究レベルともダメと厳しく指摘。「大メ」は定員をなくすかわりに教育に力を入れて個性化をはかり、研究は特定の大学に配分して、より

成果が上がるシステムに点から大学の制度改革を訴えた。これに対し、上野千鶴子(東京大学教授(社会学))は、英会話学校のように学んだ技術がそのまま役立つ「生産財としての教育」に対し、自ら問いを立てて学ぶことを追究する消費財としての教育

「助成金や研究費で恵ま(文化報道部 岩本敏朗)

列叙法

[英] accumulation

言葉をつぎつぎに並べて、聞き手に強い印象を与えようとする修辞法の1つ。同じようなものをいくつも並べる場合を、列挙法(enumeration)、異なったものを段階を追って並べる場合を、漸増法(または漸層法, gradation)という。漸増法には、だんだん上向していく場合(climax)と、下向していく場合(anticlimax)とがある。子どもがケンカで、「馬鹿、アホ、間抜け、おたんこなす、……」と連ねていくような場合は、列挙法である。宣伝文句が「日本一、東洋一、いや世界一の美味しさ!」とのべていれば、漸増法である。列叙法は、素朴であるが、例えば、多種多様な支持層に訴えたいと思う政治家の演説では、その支持層を列挙すれば効果的な場合がある。列叙法は、リズムカルな効果をねらうこともできるので、文学作品にもしばしば用いられる。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 レトリック

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会、1998。

黙説法

[英] aposiopesis

感情のたかぶるあまり、あるいは、なにかの意図をもって、話を途中でやめてしまうこと。「さっさと金を出せ。さもないと……」と強盗に脅迫される場合、金を出さないとどうなるのかとあれこれ考え、最悪のケースを想定してしまうので、かえって恐ろしい。話を途中でやめたあと、再び続ける場合には、中断法(interruption, suspension)という。再び続けるかどうかは、聞き手にはわからないので、途中でやめた段階での効果は、黙説法と同じである。可能な選択肢を一切あげないことで、聞き手の想像力を刺戟する黙説法は、可能な選択肢をすべてあげる列叙法(accumulation)と対極的だと言えよう。会話の場面で、黙説法が成立するためには、聞き手がさらに話が続くものと期待して黙っている必要がある、それには、話し手が発話を継続する権限を放棄していないことを、アイコンタクトなどの方法で言外に示している必要がある。

◎橋爪大三郎

【関連項目】 列叙法

【主要文献】 野内良三『レトリック辞典』国書刊行会、1998。

予言

[英] prediction; prophecy

これから起こることがらについて、あらかじめ述べること。通常の人が知りえない内容の予言ができる人は、超能力をそなえていると理解される。こうした予言は、どの社会にもみられるが、一神教であるユダヤ教は、これと異なるタイプの予言(預言, prophecy)をうみだし、キリスト教、イスラム教もその伝統を受け継いだ。預言は、神が選んだ預言者(prophet)に伝えられる。預言者は、(1)必ずしも教育のない、(2)ふつうの職業をもった人物(予言者としては素人)で、(3)報酬を受け取らず、(4)神の言葉を聞き、(5)権力者や社会に警告を発する、という特徴をもつ。預言者の語る言葉は、神に由来すると信じられ、またそのことを証するため、奇蹟(miracle)を起こす。モーセやイエスも、ムハンマドも、このような預言者であった。バビロン捕囚に前後して現れた数多くの預言者の預言は、旧約聖書に収められている。

◎橋爪大三郎

【主要文献】 橋爪大三郎『世界がわかる宗教社会学入門』筑摩書房、2001。